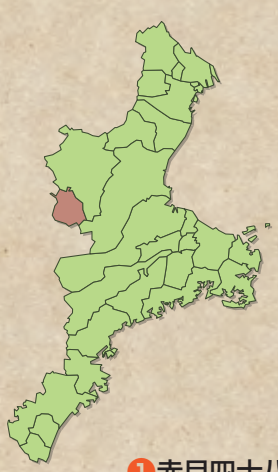
名張市（なばり）



❶赤目四十八滝
❷松明調進行事
❸観阿弥創座の地
❹夏見廃寺
❺美濃波多(美旗)新田を開く

名勝
名張市

赤目四十八滝（あかめしじゅうはちたき）

三重県と隣（とな）り合う奈良県の山間に源を発する国の名勝「赤目の峡谷（きょうこく）」にはさまざまな滝があり、その風景は観光客の目をあきさせることはありません。この地は、平安時代より江戸時代までは仏道信者（ぶつどうしんじゃ）が入山する信仰（しんこう）の場として知られてきましたが、明治時代以降、本格的な観光地として開発が進められて、現在では伊賀を代表する観光地となっています。「赤目」という名称は、一説には「阿弥陀滝（あみだたき）」が「あめがたき」に転じて、さらに「あかめ」とよぶようになったものだといわれています。「四十八滝」は滝の数が多いことを表現したものです。

観光シーズンは3月下旬の「滝びらき」イベントを皮切りに本格化し、深緑と紅葉の時期には、大阪や名古屋方面から、特にたくさんの観光客が訪れています。

また、赤目四十八滝のある峡谷には、国の特別天然記念物「オオサンショウウオ」【→P104】が生息しています。オオサンショウウオは清流の川岸や岩の下などにすみ、サワガニ、水生昆虫（こんちゅう）などを食し、体長は1.5mにも成長する世界最大の両生類です。

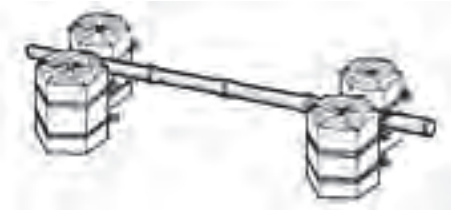
滝のようす（名張市役所提供）

▪ 三重県内に生息する他の特別天然記念物や、天然記念物について調べてみましょう。

年中行事
名張市

松明調進行事

関西では「お水取りがすめば暖かくなる」といわれ、春の訪れを告げる風物詩となっています。東大寺二月堂で行われる仏教行事、修二会の行法は3月1日（旧暦の2月1日）～3月14日までの2週間にわたって行われ、夜間に行われる法要の灯りとして松明が使われます。



【完成した松明図】

13日未明には香水を汲み上げる「お水取り」が、12日～14日には「達陀」が行われます。この「達陀」で使われる松明が一ノ井（名張市赤目町）の松明であり、鎌倉時代から使われてきたことが、古文書にも記されています。

現在も赤目町一ノ井の松明講の人たちが、毎年3月に達陀松明を二月堂に奉納しています。2月上旬に檜を切り出し、一ノ井にある極楽寺で皮をむき、松明の型にそろえ、3月12日に「松明おくり」を行います。これを「松明調進行事」とよんでおり、名張市の無形民俗文化財に指定されています。750年前より続けられています。

松明おくりのようす（名張市役所提供）

▪ 東大寺に関わる他の地域についても調べてみましょう。

歴史
名張市

観阿弥創座の地

猿楽※1、田楽※2は中世（鎌倉、室町時代）の代表的な芸能です。それを洗練・発展させて「能楽」にまで高めたのが、猿楽師として有名な観阿弥・世阿弥の父子です。観阿弥は伊賀の地に生まれたといわれ、大和国（現在の奈良県）で活躍しました。後に京都に活動の場を広げ、1374（応安7）年将軍足利義満を迎えての今熊野演能で大好評を博し、観世座の地位を確立していったといわれています。

古文書によると「伊賀小波多にて座を建て初められた」とあり、観阿弥は、妻の出生地である名張市小波田で初めて猿楽座（後の観世座）を建てました。

小波田地区は山々とのどかな田園地帯に囲まれ、その中にひときわ緑濃い鎮守の森があります。そこが「観阿弥ふるさと公園」です。現在は、創座の記念碑と檜造りの能舞台が建てられています。

ふるさと公園内にある能舞台（名張市役所提供）

※1 中国の散楽と日本古来の芸能とがとけあった雑芸・遊芸の中で、特に歌と舞の部分が発達したもの

※2 田植えの時、笛や太鼓でにぎやかに歌い舞うことで豊作を祈る民俗行事から発展したもの

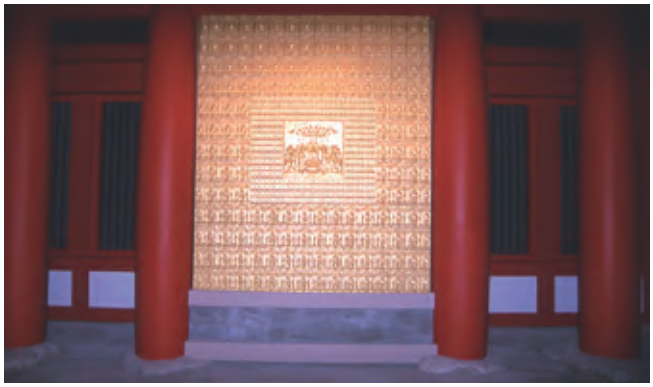
▪ 能舞台で演じられる「能」と、「能」とともに行われる「狂言」との違いを調べましょう。

史跡
名張市

夏見廃寺

名張川のほとり、夏見の名張中央公園の南側に夏見廃寺があります。古くより瓦が埋まっていることは地元の人々によって知られていましたが、1946（昭和21）年からの2年間と1984（昭和59）年からの3年間にわたり発掘調査が行われました。その結果、金堂、塔、講堂が建ち並ぶ7世紀末に建てられた古代の寺院跡であることがわかりました。金堂の内部には、塼仏（仏像を彫り込んだ焼き物）をはめ込んだ荘厳な金色の壁があったと考えられています。しかし、10世紀後半頃には火災により寺は焼失したことが、出土した瓦、仏像片から分かりました。「廃寺」とは、現存せずにすでに廃れた寺と言う意味です。

ところで、『薬師寺縁起』に「大来皇女、最初斎宮なり、725（神亀2）年をもって浄原天皇のおんために昌福寺を建立したまう。夏身と字なす。もと伊賀国名張郡に在り。」と記された箇所があり、この昌福寺が夏見廃寺と推定されます。1990（平成2）年に国史跡に指定され、現在では展示館をつくって当時のようすを復元しています。


復元された壁（名張市教育委員会提供）

▪「壬申の乱」（672年）と「大来皇女」の関係を調べてみましょう。

歴史
名張市

美濃波多（美旗）新田を開く

名張市にある美旗小学校の近くには美旗古墳群があり、かつては「美濃が原」とよばれた一面の原野でした。この原野が開墾され田畑になったのは、350年以上も前のことです。江戸時代、藤堂藩の命令によりこの土地を開いたのは、加納直盛、直堅親子でした。伊賀の奉行をしていた直盛は、伊賀国には田畑が少ないので、開墾してもっと田畑を開きたいという願いを持っていました。そんな時、着目したのが美濃が原でした。しかし、この地には、川がなく、水をどこからか引いてこなければなりませんでした。

そこで、近くにある滝之原と上小波田に大きな池を作る計画を立てました。そのために、伊賀中から数万人の人を集め、1655（承応4）年に工事に取りかかりました。こうしてできあがったのが、東之狭間池と大池です。二つの池から水を引き、約100haの田畑を開いて、約200戸ほどの家が建つようになりました。

しかし、苦労して作った大池の堤が決壊したり、東之狭間池の水が足りなかったりという悩みがありました。そこで直盛、直堅親子は、用水路を造ろうと考え、伊賀市高尾にある川から水を引く計画を立てました。現代に使われているような大型の機械があるわけではなく、その作業には大変な苦労がありましたが、用水路を見事に完成させました。

また、15kmも離れたところから引いてきた大切な水をどの田にも同じように入れるために、「分水戸帳」を作りました。そこには、水を取り入れる「戸口」の大きさや水を入れる時間を定めてあります。【→P8、9、12】

美旗新田

▪ 美旗新田の他に三重に残る新田開発を調べてみましょう。